

敦煌本 *Rigs pa drug [cu] paḥi tshig leḥur byas pa* 考

原 田 覺

敦煌の蔵訳仏典の中に、論題に示した『正理六[十]頌(六十頌如理[論頌])』が存在することは、既に Lalou 女史が目録の中で明示し、また同女史は *dKar chag lDan dkar ma* に同仏典とその Candrakīrti による『注釈』の蔵訳の記載があることも報告した¹⁾。一方、現存のチベット大蔵経所収の同仏典の本文と蔵訳との奥書は「*Rigs pa drug cu paḥi tshig leḥur byas pa* と云うもの[で] (p. 57, l. 2/3 (57-2/3)) 阿闍梨[で] 聖者[たる] 龍樹 Klu sgrub の御前からお造りになったものは円満するのである|| (3/4) インドの親教師[たる] Mu ti ta śrī の御前からと| チベットの翻訳師[たる] Pa (4/5) tshab Ńi ma grags[と] が改訂し了って決定したのである|| ||²⁾」としており、Pa tshab Ńi ma grags (1055 ~ 1141? ~)³⁾ による仏教後伝期の「改訂」蔵訳となっている。ここでは、同仏典の思想内容を問題にするよりも、上記の三種類の蔵訳資料に、更に可能な範囲で同仏典の漢訳を比較対照することによって、特に敦煌本と蔵経本との文献学的な位置付けを行いたい。

1. 最初に『注釈』の本文と蔵訳との奥書(注2参照)を見て置くと「この *Rigs pa drug cu paḥi hḡrel pa* を阿闍梨[たる] Zla ba grags pa と (1002-9/10) 云う大乘中[観]の阿闍梨[で] 地方[たる] Sa ma ta から生まれた方| 外道 (10/11) 徒[で] 推論を劣悪に述べる一切の集団の沢山の闇を摧 (11/12) 破する方| 如来[の] ご教誨[たる] 二辺を全く捨離した (12/13) 虚空の中心が[聴] 聞と思[量と] から生起した智によって顕現する様に (13/14) 成ったならば| 住処が真実でないのである様々な種類の顛倒の苦 (14/15) 痛によって苦悩した全ての衆生を洗い清める様に為さる月 Zla ba 光[で] 汚れが (15/16) 無く無量であると著名な方 grags pa であるのであって| 彼の方がお造りになった[その] *Rigs pa drug* (16/17) *cu paḥi hḡrel pa* は円満するのである|| || (17/18) インドの親教師[たる] Dzi na mi tra と| Dā na śī la と| Śī len (18/19) dra bo dhi と| 大校閲の翻訳師[で] 僧侶[たる] Ye śes sde が翻訳し了り且つ校閲し了り決 (19/20) 定したものなのである|| ||」とある。

さて敦煌本を見ると Pelliot tibétain (Pt.) No. 796 が首部であり、梵語と蔵語の論

題から開始しており、蔵語の論題は保存しているけれど、梵語の論題は空白であり、或は赤字が薄くなって写真に写らなかったのかもしれない⁴⁾。論題に続いて敬礼があり「文殊師利童子に成った方に敬礼するのである」(fol. 1a1)とし、ここまでは字句の異同はあるものの蔵経本(51-3~5)と同文であり、敦煌本に蔵経本を対照した敬礼の全文は 'hJam dpal gshonur/gshon-nur gyur pa la phyag htshal lo| ' である。一方『注釈』の敬礼は「文殊智薩埵に敬礼するのである」(935-3~4)として異なっており、漢訳本⁵⁾は敬礼を欠いている。これに続いて帰敬偈(1a1~2)があり、蔵経本の帰敬偈(51-5~7)と『注釈』の帰敬偈(936-7~9)に対応しており、それは 'gañ gis/gi[/gis]/dag skye dan hjig pa dagla |hdi-ñi tshul-kyis/tshul-hdi-yis-ni/hdi-yi-tshul-gyis rab-spañs-pañ/spañs-gyur-pa/rab-spañs-pa|b |rten-ciñ-hbyuñ-ba/rten-ciñ-hbyuñ-ba/rten-ciñ-hbyuñ-ba[/hbreñ-pa] gsuñ-bañi/gsuñs-pa-yi/gsuñs-pa-yi|c |thub dbañ de la phyag htshal lo|d| ' (敦煌本/蔵経本/『注釈』)である。敦煌本の a 句は蔵経本に一致するけれども、b 句は明確に『注釈』に一致しており、a 句の gis/dag の交替を伝承上のものとするならば、この帰敬偈は『注釈』に一致するとすべきであろう。敦煌本と蔵経本とはこの帰敬偈の直後から本文である第一偈が開始するのであるけれど、敦煌本の文面は当然のこととして「改訂」蔵訳である蔵経本と相違しており、文面对照の結論を先取りするならば、敦煌本は『注釈』の本頌とほぼ同文である(注 1, Scherrer-Schaub 参照)。尚、漢訳本にもほぼ対応する七言四句一頌の帰敬偈(254b20~21)がある。

敦煌本と『注釈』の本頌とを対照していくと、第十五偈の ab 句(1b4/964-1~2)と cd 句(1b5/同-10~11)との間に、第十四偈(1b4~5/-; 1b4/963-18~19 参照)を再度記述している(注 1, Scherrer-Schaub 参照)。一方『注釈』の当該部分を見ると、第十五偈の ab 句を注釈する中で第十四偈の ab 句(同-4~5)と cd 句(同-8)とを引用している。これによるならば当然のこととして敦煌本は敦煌では未発見の『注釈』から本頌のみを取り出して成立したものかと疑い得るであろうし、結果として本頌の形式的な頌数は計六十一偈になり、内容的には計六十偈になる。

さて Pt. No. 796 は第四十偈の abc 句の記載で終了し、一方 Pt. No. 795 は、この第四十偈の d 句から始まっており、従って両資料は本来同一の写本であり、後者が本文の奥書を保存しているので、同一写本であるならば、蔵訳の奥書を欠くものの、完本であることになる(注 1, Scherrer-Schaub 参照)。これに対して Lalou 女史は、恐らく Pt. No. 796 の 2a が六行書きである外は 1ab と 2b とが五行書きで整った書体であるのに対して Pt. No. 795 の 1a が八行書きで 1b が四行書きの雑な書体であることにより、観察した事実に従って別写本と判断したのでであろう。然しながら、

(64) 敦煌本 *Rigs pa drug [cu] pahī tshig lehur byas pa* 考 (原 田)

書体の丁寧さと乱雑さとを別にすれば、文面の接続と書体の類似とから、同一の写本と見て、敦煌本が完本であることを確認したい。

蔵経本の第四十八偈(55-18~20)は五句から成り(注2『丹珠爾』注記参照)、そのa句は同第四十六偈のa句(同-14~15)の重出であり、同五十二偈(56-5~7)は第三句を落として、結果として本頌は計六十偈になっているけれど、敦煌本(1a4, 6~7)と『注釈』(993-14~16, 997-15~16)とは各四句一頌で整っている。

Pt. No. 795 には蔵訳の奥書は欠いているけれど、本文の奥書は在り、それは「𑖦𑖩𑖪𑖫 *Rigs pa drug [cu] pahī tshig lehur* (1b3/4) *byas pa* は| 阿闍梨[たる] *Klu sgrub* がお造りになったもの[で]| [それが]円満するのである|」とあり、拙稿の頭初に示した蔵経本の奥書に近似する。蔵訳の奥書を欠いているにしても、吐蕃の梵語論書の蔵訳に於いては、本頌と注釈とを別本として蔵訳する場合、同一の翻訳師達による蔵訳であるのが一般的である様なので、上記の *lDan dkar ma* 目録に記載する同仏典も『注釈』と同一の翻訳師達による蔵訳であろうと推定できる。更に上記した如く、敦煌本は『注釈』から本頌のみを取り出した資料である疑いを免れないけれど、書写時に起きた偶然を理由としなくても、敦煌本の書き出しと末尾との文面が蔵経本にほぼ一致しており、同目録記載の同仏典の本文が本来は敦煌本と基本的に同一のものであったとして誤りは無いであろう。従って、後伝期の「改訂」以前の同仏典は敦煌本によって回収できたこととなる。一方、漢訳本では本文を終了した後に七言四句一頌の六偈(255c29~256a11)があるけれど、諸本に対応を見出すことはできない(注2 山口参照)。

2. 以上に検討した敦煌本と蔵経本とを比較対照することにより、後伝期の「改訂」を具体的に把握することができるけれど、留意して置かなければならない諸点がある。第一に敦煌本と蔵経本との原梵本に相違(語句の異同や改変)がある可能性である。第二に同一梵文であっても、用語や文脈の理解の内容に時代的思想的な変化がある可能性である。第三に特に蔵経本には誤訳の可能性も考慮しなければならない。第三の点を挙げたのは、吐蕃に於ける梵語仏典の蔵訳が国家を挙げたの組織的事業であったのに対して、後伝期のそれは飽くまでも個人的努力を基礎としているからである。その個人的努力を基礎としていたことは、一方で後伝期に各宗派が成立する原因の一ともなったであろう。さて本文の形式を見て置くと、敦煌本は音の取り方が変則的であるけれど『注釈』本頌と対比すると、共に基本的に七音四句一頌であり、蔵経本も同様で、漢訳本は五言四句一頌であり、諸本は表題通り計六十偈の本頌を本文の内容としている。尚、以下の敦煌本と『注釈』

の引用に於いては綴字法の相違は基本的には無視する。

敦煌本の第一偈は ‘gañ blo yod dañ myed pa las [a] rnam par ḥdas śiñ myi gnas paḥ/ pa|b |de dag zab mo dmyigs myed pa-yi/paḥ|c |rkyen kyi/gyi don la rnam par sgom/ bsgom|d-1|’ (Pt. No. 796, 1a2; 939-11~13(敦煌本; 『注釈』, 以下同様))であり, 蔵経本は ‘gañ gis-blo-gros/dag-gis-blo yod myed las|a |rnam par ḥdas śiñ mi (51-7/8) gnas pa|b |de dag gis ni rkyen gyi don|c |zab mo dmigs med rnam par (8/9) rtogs|d-1|’ である。蔵経本の内 a 句の gañ [dag gis] は c 句の de dag [gis ni] に呼応しているけれど, 敦煌本の呼応は不明確である。同 blo [gros] の原梵語は同一であろう。b 句は同一であるけれど c 句と d 句とは殆ど入替わっている。また d 句の rnam par sgom [bsgom]/ rnam par rtogs が同一原梵語であったとは認め難い。漢訳本は「有と無との二辺を離れて, 智者は所依が無い, (254b22/23) 甚深にして所縁が無いので, 縁生の義が成立する(1)」とし, 漢訳の「智者」は blo [gros] に, 同「所依が無い」は myi gnas paḥ/ pa に, 同「縁生の義」は rkyen kyi/gyi don に対応するであろう。

同第二偈は ‘ñes pa thams cad ḥbyuñ ba-ḥi/baḥi gnas|a |myed pa rnam par bzlog zin kyis/ gyis|b |’ (同-2; 941-6~7) と ‘rigs pa gañ gis yod pa (2/3) yañ|c |bzlog par bya ba mñan par gyis|d-2|’ (同-2~3; 941-9~10) とであり, 蔵経本は ‘re shig ñes kun ḥbyuñ baḥi gnas|a |med ñid rnam par bzlog (同 9/10) zin gyis|b |rigs paḥi/pa gañ gis yod ñid dañ|c |bzlog par ḥgyur ba (10/11) mñan/mñam par gyis|d-2|’ である。この内, 蔵経本は a 句の re shig 相当の梵語が混入していたのであろうけれど, それを挿入する為に thams cad を kun に置き換えたので, 音節の区切りは ñes kun であるのは明らかであるけれども kun ḥbyuñ [baḥi] 即ち集起, 或は集[諦]と紛らわしくなっている。また b 句の myed pa/ med ñid と c 句の yod pa/yod ñid との「改訂」も原梵語の相違を感じさせるけれど c 句の yañ/dañ の交替は yañ の方が自然であろう。また d 句の bya ba/ḥgyur ba の交替は原梵語動詞の格変化に相違があったのかもしれない。尚『注釈』は前半二句を論争相手の見解とし, 後半二句を著者である龍樹の見解としている。漢訳本は「若し法が無性であると謂うならば, 即ち諸の過失を生じる, (24/25) 智者は応に如理に, 法が有性であることを伺察するべきである(2)」とし, 漢訳の「如理に」は rigs pa [gañ] gis に対応するであろう。

同第七偈は ‘dños/dañ po skyes pa shig pa la|a |ci/ji ltar ḥgog pa brtags/brtag/rtag pa bshin |b |de bshin sgyu ma byas pa ltar|c |mkhas pa dag gis ḥgog/ḥgogs par dgoñs|d-7|’ (同-5; 950-19~20) であり, 蔵経本は ‘dños po byuñ (52-5/6) ba shig pa la|a |ji ltar ḥgog par brtags/brtag pa bshin|b |de bshin dam pa (6/7) rnams kyis kyañ|c |sgyu ma byas ltah/paḥi ḥgog pa

(66) 敦煌本 *Rigs pa drug* [cu] *paḥi tshig leḥur byas pa* 考 (原 田)

bshed|d-7|'である。この内 a 句の *skyes pa/byuñ ba* の交替は、蔵訳語に対応する原梵語に *upapanna* [/utpāda] / *utpanna* [/utpatti] の対応などがある⁶⁾ けれど、原梵語に相違が無いのであれば「改訂」者の語感や文脈理解によるとする以外に、わざわざ「改訂」する意味が不明確になるので、相違があったのであろうか。一方 b 句は全同である。続く c 句と d 句とは前後が入替わっており、その内で *mkhas pa dag/dam pa mams* と、末尾の *dgoñs/bshed* との交替も原梵語に相違があったのであろう。ただ前後の入替えについては、蔵経本の方が整理が付いているけれども *Itaḥi/paḥi* という表現には不自然さを感じる。漢訳本は「彼の有性を生じることを破すならば、滅を分別することも亦た然りである、(254c8/9) 幻が作る所の事の如く、滅には現前に実が無い(7)」とし、漢訳の「破す」は *hgog pa[r]* に、同「滅」は *shig pa* に対応するであろう。

同第十一偈は 'mthoñba-ḥi/mthoñ-baḥi chos las/la mya ñan ḥdas|a |bya ba byas pa-ḥyañ/paḥaṇ de ñiddo/ñid-do|b |' (1b2: 958-19) と 'chos śes de ḥi/yi ḥog du/tu ni|c |ḥdi la bye brag dbye yod na|d-11|' (同: 959-16) とであり、蔵経本は 'de ñid mthoñ chos mya ñan ḥdas/las|a |ḥdas (13/14) śiñ bya ba byas paḥaṇ yin|b |gal te chos śes mjug/hjug thogs su|c |ḥdi la bye (14/15) brag yod na ni|d-11|' である。この内 a 句と b 句とで *de ñid* の位置が入替わっており、その為に蔵経本では *ḥdas* が b 句に移っただけでなく *las/la* を欠いている為に、重要な *mthoñ chos* の構文上の資格が不明確になっており、末尾に *yin* を加えて述部を作り、音数合わせもしている。一方で蔵経本は末尾の *na* [ni] の働きを補う為に *gal te* を加えて cd 句が ab 句に対する条件句であることを明確にしている。また c 句では *de ḥi* [/yi] *ḥog du* [/tu] *ni/mjug* [/hjug] *thogs su* の交替は *deḥi ḥog tu* で音数も意味も充分であるのに、そうしていないのはやはり原梵語に相違があったのであろう。蔵経本は *dbye* を欠いているので文意が不明確なのに、末尾の *ni* で音数合わせをしているので、対応する原梵語が無かったのであろう。漢訳本は「若し法が寂靜であるのを見るならば、諸の所作も亦た然りである、(16/17) 此の最勝の法を知るならば、法の智が無辺であることを獲る(11)」とする。

同第三十七偈は 'ma riḡ rkyen kyis/gyis ḥjigrtē/hjig-rten shes|a |ḥdi ltar rdzogs paḥi sañs rgyas gsuñs/gsuñ|b |de/deḥi phyir ḥjig rten ḥdi dag kyañ|c |rnam par rtog pa/par ci/cis mi ḥthad|d-37|' (2b4: 984-10~12) であり、蔵経本は 'hjig rten ma riḡ rkyen can du|a |gañ phyir sañs rgyas rnam gsuñs pa|b |(54-19/20) ḥdi yi phyir na ḥjig rten ḥdi|c |rnam rtog yin shes cis mi ḥthad|d-37|' である。同偈 a 句は *shes/du* で仏説の内容であることを示し、敦煌本は *kyis* によって *ḥjigrtē* の理由根拠を示し(依主釈)、蔵経本は *can* によっ

てその内実を示し(有財釈)ており、恐らくは梵語の複合語の理解に相違があったのであろうけれど、その仏陀を b 句では *rdzogs pañi/rnams* と異なった語句を付して訳出しており、同じく原梵語に相違があったのであろう。蔵経本は b 句の *gañ phyir* と c 句の *ñdi yi phyir [na]* との呼応により梵語関係代名詞の存在を推定できるけれど敦煌本にはそれは無い。また敦煌本 c 句の *dag kyañ* の代わりに、音数合わせの *yi* と *na* とを加えているのも、原梵本の相違を示すであろう。一方、敦煌本 d 句の *mam par rtog pa[/par]* を縮略して *yin shes* を付加して、文意をより明確にしている。漢訳本は「是くの如き無明の縁は、仏が世間の説と為した、(255b10/11) 若し世に分別が無ければ、此は云何にして[も]生が無いであろう(37)」とする。(同第四十三偈の検討は紙幅の都合で割愛する)

同第五十四偈は '*dños po gzugs brñan lta bur ni|a |ye śes (7/8)myiggis/mig-gis rab mthon na|b |bdag ñid chen po de dagni/dag-ni|c |yulgyi/yul-gyi ḥdam la myi chagsso/chagsso|d-54|*' (1a7~8; 998-11~12) であり、蔵経本は '*bdag ñid che rnams dños po dag|a |(56-9/10)gzugs brñan lta bur ye śes kyis|b |mig gis mthon nas yul shes ni|c |bya (10/11)bañi ḥdam la mi thogs so|d-54|*' である。蔵経本は *bdag ñid che rnams* を a 句に挿入しているので、以下の文面が次句以下にずれこみ、また *dños po dag* と複数形にしており、更に b 句の *ye śes kyis* と c 句の *mig gis* で同格を表示する様であり、この表現は梵語語法に順ずるもので蔵語語法ではない。一方 c 句から d 句に *shes [ni] bya bañi* を挿入して文意を明確にしており、敦煌本 b 句 *mthon na* と蔵経本 c 句 *mthon nas* との相違は格変化か原梵語の相違であろうし、また d 句末尾の *myi chags/mi thogs* の交替は原梵語が相違していたのであろう。漢訳本は「性は喩えれば影像の如くであり、智の眼の境界に非ず、(255c15/16) 大いなる智は本より生じない、微細な境界の想を(54)」とする。漢訳の「性」は *dños po* に、同「境界」は *yul* に、同「大いなる智」は *bdag ñid chen-po/che-rnams* に対応するであろう。

3. 前節に於いては「改訂」の具体的内容を明らかにする為に、相違の大きい偈頌を選んで検討したけれど、殆ど「改訂」を施していない偈頌も当然あるので、それ等も例示して置くと、同第四偈は '*- yod pas rnam par myi ḥgrol/grol tel |myed pas srid pa ḥḍi la/las myin| |*' (1a3; 944-14~15) と '*dños ñaṅ dños (3/4)myed yoñs śes pas| |bdag ñid chen po rnam par ḥgrol/grol| 4|*' (1a3~4; 944-20~21)' であり、綴字法の問題は別として、蔵経本(51-13~52-1)は語の異形を含めると上記の偈頌に一致する。同様の一致を示す偈頌に第二十七、三十四、四十三、四十五、五十三、五十七、六十偈(敦煌本 2a5~6, 2b3, 1a2, 3, 7, b1, 3; 『注釈』974-5~7, 982-4~6, 988-10~12, 18~20, 997-19~

(68) 敦煌本 *Rigs pa drug* [cu] *pañi tshig lehur byas pa* 考 (原 田)

21, 1000-2~4, 1001-10~12; 蔵経本 53-21~54-2, 13~15, 55-9~10, 12~14, 56-7~9, 15~17, 56-21~57-2)がある。漢訳本は「有性であると説く可からず、無性であると説く可からずして、(254c2/3)[有]性と無性とを了知して、大智は如理に説く(4)」とする。漢訳の「大智」は *bdag ñid chen po* に対応するであろう。

一方、その相違が思想内容に関わる偈頌もあり、例えば同三十五偈は ‘*mya ñan ḥdas pa bden gcigdu/gcig-pu|a |rgyal ba rnams kyis nam/rnams/rnam - gsuñs pa|b |de/deḥi tshe lhag ma log pa shes|c |mkhas pa su shig rtog/rtogs myi byed|d-35|*’ (2b3; 983-8~10) であり、蔵経本は ‘*mya ñan ḥdas pa bden gcig pur|a |(15/16)rgyal ba rnams kyis gañ gsuñs pa|b |de tshe lhag ma log min shes|c |mkhas (16/17)pa su shig rtog par byed|d-35|*’ (54-15~17)である。この a 句では *du* [*pu*]/*pur* の対応があり b 句の *nam/gañ* と c 句の *de* [*deḥi*] *tshe* との呼応があると共に、敦煌本の cd 句は「そ[の]時[に]残余は[顛]倒である」と *|c|* 学者は一体誰が分別される/通達される[ように]為されない(分別/通達させられない)か[させられる] *|d|*」とし、蔵経本は「そ[の]時[に]残余は[顛]倒でないのだと *|c|* 学者は一体誰が分別される様に為される(分別させられる)か[させられない] *|d|*」と読解すると各原文のままで文意がほぼ通じる。漢訳本は「此の一が若し如実であるならば、仏は説いて涅槃と為す、(255b6~7)此は最勝にして妄が無く、智が即ち分別することが無い(35)」とする。漢訳の「一」は *gcig* [*pu/pur*] に、同「如実」は *bden* に、同「妄」は *log* [*pa*] に、同「智」は *mkhas pa* に対応するであろう。

4. 以上に概観した如く、敦煌本は「改訂」以前の蔵訳に相当し、蔵経本とは原梵本を異にしている。蔵経本は時に文脈を敦煌本よりも明確にしている場合もあるけれど、その「改訂」の意図が不明確な場合も多く、訳文に説得力があるとはいい難く、寧ろ敦煌本との対照研究によって、梵語原典本来の意味内容を検討すべきであろう。漢訳本は既に山口氏も指摘する(注2 山口参照)様に、取意的意識であって、文脈の比較対照によって文脈を確定する程度の役割を果たすであろう。また *Ñi ma grags* が『注釈』を「改訂」しなかったのは、当然のこととして彼がその梵本を持っていなかったからであり、敦煌本相当の蔵訳に「改訂」を加えたのは、彼の持っていた梵本との間に相違が多いと考えたか、吐蕃期の蔵訳技術を習得する一助としての試みであったか、或はその両者であったのかも知れない。推定の後者を考えるのは *Candrakīrti* の蔵訳『注釈』を彼が見ていたのであるならば、彼の「改訂」による蔵訳が必ずしも『注釈』の文面に一致しない場合もあることを承知していた筈だからである。思想内容の検討は、以上に一部示した様に、本頌全体の詳細な比較対照を経た上で為されるべきであろう。

1) M. Lalou, *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-hauan conservés à la Bibliothèque Nationale*, vol. I, Paris, 1939, Nos. 795~6; do., *Les Textes Bouddhiques au Temps du Roi Khri-sroñ-lde-bcan*, *Journal Asiatique* 241-3, Paris, 1953, Nos. 591~2 を参照頂きたい。学会での発表とは別に、斎藤明氏より Cristina A. Scherrer-Schaub, "Some remarks on P.T. 795 and 796," *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung.*, Tomus XLIV (1-2), Akademiai kiado, Budapest, 1990 があり、同女史は *Mélanges Chinois et Bouddhiques*, vol. XXV, Bruxelles: Institut belge des Hautes Etudes Chinoises, 1991 に学位論文(Candrakīrti『注釈』の研究)を発表している(1990 年論文, 注 16 参照)との教示を受け、更に 1990 年論文の pdf 版のご惠贈を受けたので、斎藤氏に心からお礼を申し上げたい。同論文は敦煌本のローマ字転写の公表を主としているけれども、その前段の書誌的認識は、以下の筆者の議論と重複する部分があるので出来るだけ注記していきたい。また拙稿には利用できなかったけれど Joseph J. Loizzo, *Nāgārjuna's Reason Sixty with Chandrakīrti's Reason Sixty Commentary*, The American Institute of Buddhist Studies, New York: Columbia University, 2007 も参照頂きたい。

2) 中国藏学研究中心《大藏經》对勘局『〔中華大藏經〕丹珠爾(对勘本・藏文)』(『丹珠爾』)第五十七卷, 中国藏学出版, 北京, 2000 年の 3052 番を, Candrakīrti の『注釈』は同六十卷の 3090 番を参照頂きたい。尚, 同仏典に『注釈』を加味した研究に旧く山口益「龍樹造『六十頌如理論』の註釈的研究」『中観仏教論攷』山喜房仏書林, 東京, 1934(昭和 19)年があり, 思想研究を主題としている。また『注釈』の現代語訳に瓜生津隆真「六十頌如理論」『〔大乘仏典 14〕龍樹論集』中央公論社, 東京, 1974(昭和 49)年があるけれど, 筆者の理解を示す為に, 別に現代語訳する。

3) チベット仏教後伝期の年代に関しては, 問題の無い限り, 基本的に bSod gnam rgya mtsho(黄明信)ほか編 *bsTan rtsis ka phren lag deb*(『藏族歴史人物年代手冊』)民族出版社, 北京, 1996 年に従う。拙稿「チベット仏教史年表(西暦 1027~1086, 1087~1146 年)」『〔国士舘大学文学部〕人文学会紀要』33, 37, 同学会, 東京, 2000(平成 12), 2005(平成 17)年を参照頂きたい。

4) 敦煌本は西北民族大学ほか編『法国国家図書館藏敦煌藏文文献』8, 上海古籍出版社, 上海, 2009 年に所収のものを利用する。

5) 漢訳は高楠順次郎ほか編『〔大正新脩〕大藏經』第 30 卷, 同刊行会(大藏出版), 東京, 1927(昭和 2)年, 1575 番, 254b15 以下を参照頂きたい。

6) 西尾京雄編『〔藏梵対照〕翻訳名義大集西藏語索引』仏典研究 1, 仏典研究会, 1936(昭和 11)年(『〔梵藏漢和四訳対校〕翻訳名義大集』鈴木学術財団の所収版による)の該当蔵語の項を参照頂きたい。外にも幾種もの蔵梵辞典, Ye šes sde や Ņi ma grags の蔵訳仏典の索引などがあるけれど, いたずらな煩を恐れて, ここでは用いない。

〈キーワード〉 Klu sgrub, *Rigs pa drug cu pahī tshig lehur byas pa*, 『六十頌如理論』, Zla ba grags pa

(国士舘大学教授)